第二十八回

紫雲会

in 金沢

第一日目　平成二十九年十一月二十四日(金)　午後一時　始メ

第二日目　平成二十九年十一月二十五日(土)　午前十時　始メ

於　石川県立能楽堂

〒九二〇―〇九三五
石川県金沢市石引四丁目一八―三
TEL(〇七六)二六四―二五九八

番組

〈第一日目〉

平成二十九年十一月二十四日（金）
午後一時　始メ

舞囃子

岩船

本田裕美

大鼓　飯嶋六之佐
小鼓　上田美雪
笛　江野泉
太鼓　大橋紀美

地　川島英治
広島克栄
松村明宏
本博

来殿

北井正美

大鼓　柿原光博
小鼓　住駒俊介
笛　瀬賀尚義
太鼓　麦谷暁夫

地　佐野弘宜
渡邊荀之助
渡邊茂人
松本博

草紙洗

吉田加奈子

大鼓　柿原光博
小鼓　住駒幸英
笛　瀬賀尚義

地　佐野弘宜
広島克栄
渡邊茂人
山崎健

14：00

独吟

柏崎

伊勢見和子

西王母

室屋佳子

舞囃子

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 上田美雪
笛 江野泉 大橋紀美

地 松本 山金広 崎森島 秀克 健祥栄博

枕慈童

戎井昌代

大鼓 柿原光博
小鼓 住駒俊介
笛 杉市和 上田悟

地 佐野 川広渡 島島邊 英克荀之 治栄助 宜弘

絃上

永井兵嗣

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 上田美雪
笛 江野泉 大橋紀美

地 田広島 崎島村 本克明 博宏栄 甫

15：00

養老

小久保浩

仕舞

鶴亀 曲

小泉雄次

地 佐野 田金広 崎森島 秀克 甫祥栄 宜弘

巻絹 イロヘ

田口紀子

舞囃子

大鼓 柿原光博
小鼓 住駒幸英
笛 杉市和 上田悟

地 広島 佐野 渡邊崎 茂由隆 人於三 栄克

藤

成瀬外喜子

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 上田美雪
笛 瀬賀尚義 麦谷暁夫

地 佐野 山広大 崎島坪 克喜美 健栄雄 宜弘

邯鄲

西岡由紀子

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒俊介
笛 杉市和 上田悟

地 島村 大坪 川広明 島島喜 英克美 治栄雄 宏

16：00

連吟

養老

シテ 松蔵洋二
高野秀幸

番囃子

高砂

ツレ 渡邊茂人
シテ 黒川忠行
ワキ 平木豊男
ワキツレ 渡貫多聞

大鼓 柿原光博　太鼓 麦谷暁夫
小鼓 住駒俊介　笛 杉市和

地 金森秀祥
渡邊荀之助
田崎隆三
佐野由於
田崎甫

（終演予定　午後五時頃）

〈第二日目〉

平成二十九年十一月二十五日（土）
午前十時　始メ

居囃子

翁

シテ 高野秀幸
千歳 谷川義博
小鼓 住駒幸英　小鼓 住駒俊介
小鼓 渡貫多聞　笛 瀬賀尚義

地 田崎甫
佐野由於
渡邊茂人
松本博

素謡

蝉丸

シテ 黒川肇子
ツレ 馬縅葉子
ワキ 濱武美和子
ワキツレ 松永裕子
西岡由紀子
戎井昌代

地 吉田加奈子
武部久美
乾貴子
石八重子
北井正美

伏江たづ子
成瀬外喜子
広島栄里子
高井和代
本田裕美
伊勢見和子

11：00

枕慈童

独鼓

山本洋治
春成泰
磯貝良雄

太鼓 大橋紀美

鮎之段

独調

柿原葵

田崎甫

七騎落

舞囃子

西尾亘平

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 上田美雪
笛 瀬賀尚義
地 松本博 金森秀祥 佐野玄宜 高野秀幸

高野物狂

林忠央

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒俊介
笛 瀬賀尚義
地 佐野玄宜 大坪喜美雄 島村明宏 山崎健

12：00

鶴亀

曲

小泉雄次

高野物狂

独吟

釣谷清治

松風

安達とも子

大鼓 柿原光博
小鼓 住駒幸英
笛 江野泉
地 広島克栄 田崎隆三 渡邊荀之助 田崎甫

龍田

伏江たづ子

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 上田美雪
太鼓 麦谷暁夫
笛 瀬賀尚義
地 山崎健 佐野由於 田崎甫 米島和秋

鞍馬寺

石八重子

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒幸英
太鼓 麦谷暁夫
笛 江野泉
地 渡邊茂人 渡邊荀之助 広島克栄 川島英治

13：00

仕舞

清経

シテ 柿原未奈

地 渡邊茂人 広島克栄 広島明宏 広島栄里子

袴能

葛城

後シテ 乾貴子
前シテ 高井和代

ワキ 北島公之
ワキツレ 平木豊男

大鼓 柿原光博 太鼓 大橋紀美
小鼓 住駒俊介 笛 江野泉

後見 田崎隆三 大坪喜美雄

地 高岸忠央 林市郎 釣金佐 川島由 谷森村 清秀明 治祥於 佐野宏 野玄 宜

居囃子

竹生島

大鼓 柿原光博 太鼓 大橋紀美
小鼓 武部久美 笛 瀬賀尚義

シテ 伏江たづ子
地 伊勢見和子 広島栄里子 成瀬外喜子 吉田加奈子

14：30

黒塚

シテ 坂本るり

ワキ 平木豊男
ワキツレ 北島公之

大鼓 飯嶋六之佐 太鼓 上田悟
小鼓 住駒幸英 笛 江野泉

間 炭光太郎

後見 田崎隆三 広島克栄 広島栄里子

地 高野秀幸 佐野玄宜 米島和秋 大坪喜美雄 山崎健 渡邊荀之助 松本博 田崎甫

養老

シテ 豊田稔 小久保浩

大鼓 谷川義博 太鼓 大橋紀美
小鼓 住駒俊介 笛 瀬賀尚義

連吟

シテ 古田励子 石八重子 本田裕美 室屋佳子 広島栄里子

袴能

船弁慶

舞囃子

安宅

高岸市郎

大鼓 柿原光博
小鼓 住駒俊介
笛 江野泉
地 渡邊茂人 広島克栄 藪俊彦 山崎健

弓八幡

渡邉文雄

大鼓 柿原光博
小鼓 住駒俊介
笛 江野泉
地 島村明宏 広島克栄 藪俊彦 川島英治

鶴亀

栗田征夫

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒幸英
太鼓 大橋紀美
笛 江野泉
地 藪俊彦 広島克栄 金森秀祥 松本博

（終演予定　午後四時三十分頃）

能のあらすじ――

高砂

肥後国阿蘇神社の神主友成が、従者をつれて都へ旅立った。途中播磨国高砂の浦に立寄ると、老翁と老婆が来て松の木陰を掃き清めるので、高砂の松とはどの木か尋ね、高砂・住の江の松は国を隔てた土地であるのになぜ相生の松というのかと問うた。老翁は今木陰を清めているのが高砂の松で、たとえ山川万里を隔てても夫婦の愛は通い合うものと言い、高砂・相生の謂れをのべ、さらに松についてめでたい故事をあげ、自分らは高砂、相生の松の精が夫婦として現れた姿で、住吉にて待つといい、舟で沖へ消えた。

「高砂や、この浦舟に帆をあげて、月もろともに出汐の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住の江に着きにけり」と友成も浦人の舟で住の江に着くと、住吉明神が出現し、春景色を賞し、御代を祝って舞を舞う。「千秋楽は民を撫で、万歳楽には命を延ぶ。相生の松風颯々の声ぞ楽しむ」と民の安全と君の長寿を念願し、松吹く風の音に平和な響きを楽しむ。

葛城

出羽の羽黒山から葛城山に到着した山伏達は、大雪に難渋して木陰へ立ち寄ると、女笠を被り雪の枯枝を持った山女が現れ、山伏達を庵に案内する。山女は標を焚いてもてなし、世の無常を語る。山伏達が後夜の勤めにかかろうとすると、山女は自分はこの山の岩橋を架け得なかった罪で明王の縛縄を受けている葛城の神だと打ち明け、加持を依頼して隠れる。

後は葛城の神が現れ、蔦蔓のいましめと醜い顔貌を恥じ、懐旧の大和舞〈序舞〉を舞う。月下に白く冴える山々を描き出し、我が顔の見られぬ先にと、夜の明けそめる前に真暗な岩戸に帰る。

黒塚

奥州の安達原で行き暮れた回国行脚中の熊野の那智の山伏祐慶の一行が、野中に一軒家を見つけて宿を乞う。作り物の中にいる家主の里女は、一旦は断るが、たっての願いに根負けして山伏達を家に入れるていで、作り物を出す。家の中に見慣れぬ枠枠輪を目に止めた祐慶が頼むと、女はそれを回して糸を繰り始め、渡世の業に身を苦しめる果報のつたなさを恨み、老いの訪れの早さを嘆く。やがて調子を変えて浮々と糸尽くしの歌を謡い、転じて長き命のつたなさをかこち、糸車を繰るのをやめて泣き崩れる。夜が更けて冷え込みも厳しくなる。と、女は上の山から薪を採って来るといい、行きさして振り返り、私の閨を決して覗くなと念を押す。橋掛りを行く女の後姿には、すでに鬼の気配がある。

能力は祐慶の目を盗んで閨の内を見、人の死骸のおびただしさ、腐臭の物凄さに驚倒する様を演じる。

能力の報告に驚いた山伏達が一目散に逃げて行くと、鬼女と変じた女が、薪を背に、火炎を放ち、雷鳴を轟かせて、一口に食おうと鉄杖を振り上げて襲いかかる。祐慶は五大明王の功力を頼み、数珠をもんで祈り、両者は激しくせめぎ合うが、鬼女はついに祈り伏せられ、秘密を暴かれた怨みを残しながら夜風の中に去って行く。

（能楽ハンドブックより）